

連珠っておもしろい

九段 河村典彦

● 第64回 ●

■ ドラフト会議

今回はドラフト会議の話をした。と言ってもプロ野球ではなくAKBのドラフト会議のことである。最近アイドル系の話が多くて恐縮だが、ドイツにいますどうしてもそういう映像を多く見てしまう(まあ元々好きなのであるが)。AKBがドラフト会議なる物をすることは知っていたが、とても追いついていけないとあきらめていた。ところが、たまたまユーチューブで放送を流していたのを見て、ついつい引き込まれてしまった。地上波ではなかったの、日本に居ては見えていなかっただろう。

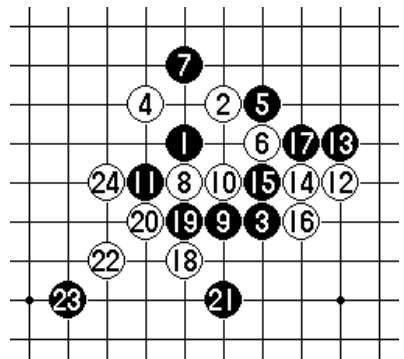
候補生は29名いたのだが、結果的には20名が指名された。1ヶ月以上前から

レッスンが行われており、その様子も放送されていたが、大変なレッスンに耐えたアイドルの卵達には、既に情が移ってしまっていてちよっとした感動を覚えたのだ。レッスンの辛さは、新入社員の時に受けた自衛隊研修を思い出させて、自分の娘みたくな年齢の子があんなによく頑張ったのだと思わず放送を何回も見ました。

さて、連珠界に目を移せば、ドラフトにかかれれば確実に1位指名になりそうな2人による決定戦が行われた(よかったです。何とか軌道修正できた)。

挑戦手合い第1局はたまたま日本出張で見に行くことができた。私が会場に着いたときには白18まで進んでいた。流星の提示も意外なら、この進行も予想外であった。白12とはさすが中村氏以外は打てない一着だろう。

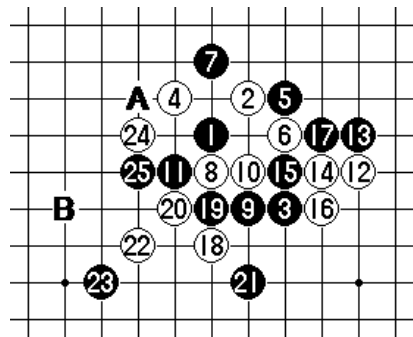
<第1局:白 24 まで>



だが、冷静に黒19に入られて、さて、困った。早くも白が主導権を取っているものの、具体的にどう良くしたらいいかが難しい。上辺を黒に先着されてはいけないので、左辺からうまく上辺に回りたい所だ。

中村氏のことだから単に白20もあるかなと思っていたら、本当に白20に打たれた。だがしかし、これは徐々に優位を拡大しようと言う手なので、早めに左辺に展開する必要があるので、通常は白24で変化図の24もしく

<変化図>



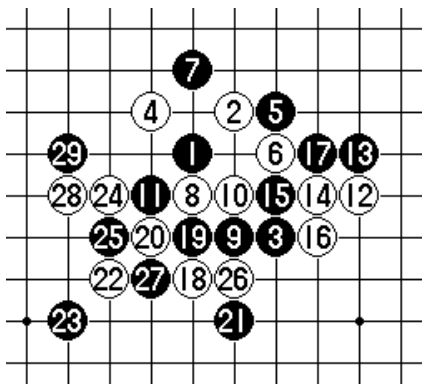
はAに打ちそうなものだ。

だが、変化図のAでも24でも黒25に止められてしまう。どうやらここが急所のように、だから実戦では白24に打ったのだろう。ちなみに、変化図で黒25をA止めなら、白Bで攻めが続く。

家に帰って続きを見たら、黒25は予想通りだったのだが、白26と防ぎに行ったのはこれも予想外だった。白有利と想っていたが、ここで防ぎに行くのでは案外白は良くなかったのか?以下黒が攻勢を取るようになる

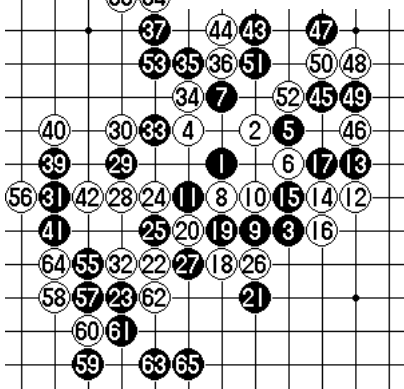
り、結果は満局であった。

<黒 29 まで>



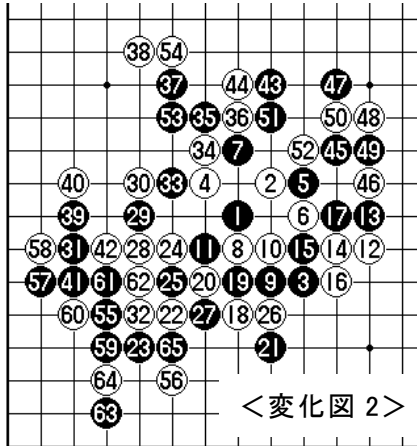
連珠世界 12 月号に本局の解説が岡部君によって書かれていた。その中で終盤に黒勝ちがあったと書かれているので、それについて触れてみたい。

<変化図 1>



実戦黒 55 から、譜のように左辺に三を引く。まず上止めだが、これには黒 57 とミセるのが妙手。白 58 の止めに黒 59 と飛び出して勝てる。白 58 を 62 も剣先に注意すれば当然勝てる。次に、白 56 の反対であるが、黒 57 が先手で利くので、これも黒 59 と打てば勝ちが出る。

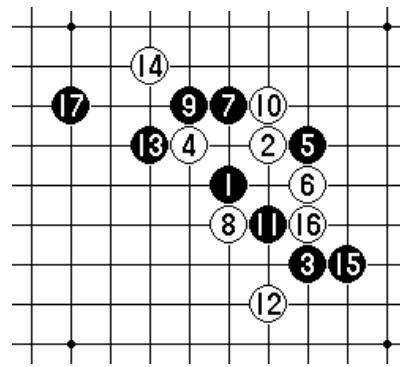
<変化図 2>



翌日の第 2 局は雨のため見に行かなかったが、ネット中継で十分楽しめた。またも流星には驚いたが、明らかに中村氏には策があ

ると思われたが、受けて立つのも勝負師の術である。ただ、「教えてもらおう」という気になると、勝負には勝てない。単手数で終局になったのも、中村氏の研究の成果だろう。

<第 2 局 (黒 17 まで)>



その第 2 局を少し振り返ってみよう。黒 9 は 10 と共に有力な手なのだが、その後黒 13、17 と打つ構想は非凡だろう。中村氏ぐらいでないといふ黒 17 の手は思いつかない。コンピュータがこういふ手を探すのは難しいと思うのだが、すぐに達成してしまいそうで、そ

れもまた怖い現実である。 ■ 日本帰任

最後にご連絡だが、実は、この 2 月で日本に帰任することになった。3 年半の生活であったが、名残惜しい。最後の冬休みということので予定を変更し、長女と 2 人で年始をパリで過ごすことになった。

また、年末にはかねてから誘われていたタリンオリンピックにも出場することにした。最初で最後の機会だろうから、十分楽しみたいと思っている。

3 年半の間に、スウェーデンには 5 回、エストニアにも 3 回 (もう 1 回行く予定だが)、ポーランド、チェコ、ロシアと中国にそれぞれ 1 回連珠で行くことができた。そういう活動を通じて各国の連珠家といろいろな交流できたのが良かったと思っている。日本に帰ってからも交流はぜひ続けていきたい。